

魅せられて 私の「歌」道標



己を捉える

御供平信

昭和十九年元旦に群馬県多野郡鬼石町浄法寺に生まれた。聖徳太子のおともだったと伝わる御供の姓のルーツはこの地と言われる。

元日生まれというのは余り信用されないが、母がへ助産婦さんが「大変な年だよ元旦に三人も生まれたんだから」と言っていた」とい通り、同級生に元日生まれの男女がいた。

母の叔父に姓名学の研究家がいる、めでたい生まれの男子に「平信」の名を与えてくれた。御供の「御」を十画に数える異体字で戸籍が記されており、総画数は三十一となる。三十一文字、すなわち歌詠みとなることを期待されていたのかも知れない。

父の弟である叔父の御供盛が「あぢさゐ」の会員で、私鉄の機関士の職業詠や難病で妻を、事故で息子を亡くす歌を詠んでいたのに刺激され、十四歳頃から俳句や短歌を詠み、高校では同級生と文芸部を作って雑誌を出した。卒業後新聞で募集された短歌同好会で知り合った真行寺四郎に勧められ、三浦武と共に昭和三十八年に十九歳で、「国民文学」に入会し、窪田空穂、松村英一、千代國一と継承される現実重視の写実の流れに学ぶこととなった。消防署員である

真行寺の上司で国民文学同人の遠藤貞巳のもとに毎月五十首から百首くらい持参して添削を受け、「新人会」で千代國一の指導を受け、

松村英一の選を受け、二十二歳で結社最年少の同人となった。と言っても、決して楽に同人になったわけではない。上京のうちに高崎線の車内から見たかつて畑の工場用地の雑草の中に一人の老婆が佇み、前掛けが疾風に煽られていた。農に老いた祖母のように思えてへ工場用地に佇む老婆の前掛けを煽りて夏のあらしすぎゆく」と詠んで投稿したが、誰からも一顧もされなかった。中学時代に詠んだへ寒空に赤城の山を北に見て麦踏む足の霜焼けかゆし」も同様だった。自分で短歌（詩）だと思い込んでいたのは人情的な事柄の羅列で、事柄は写実的に詠われることで始めて詩になるのである。

白煙の黒煙となり六十両ひきてたちゆく
汽車のとどろき

『河岸段丘』

ふりしぶく雨の操車場たちてゆく汽車の
煙の低く地を這ふ

十代の終りの作。生活の実感を色彩やものの様子に託す手法の一つを身につけたことになる。

昭和三十七年から旧国鉄に勤務、山の手線田端たばたの駅員、今は新幹線の基地となった田端操車場での貨車の連結手を経て、四十一年から鉄道公安官となり、七〇年安保を中心とした労働闘争の現場に、体制側の職員として立った。労組員として、山の手線の電車の運転士をしている兄とも対立する立場であった。

運転士兄も電車を遅らすか地下に高まる

いらだちのこゑ

『河岸段丘』

いわゆる順法闘争で階段規制をする池袋駅の朝のラッシュの中からの一首で、個人の権利意識がどうあろうとも許しがたい彼らの行為は、やがて国電暴動等の事態をまねいた。夕刊のトップの写真にも、テレビニュースにも、こんな制服姿でしばしば登場した。本当は写真だけでなく、私の歌を載せて欲しいと願ったものである。

スト権ストや暴動などの渦中において、何も自己主張できぬ生き方ほど悲しいものはないと思った。短歌とめぐりあえた自分を仕合しあわせだと思いつながら、耐えがたい憤怒の気持ち詠うことで幾分でも和らげたいと、詠いつづけた。選を託した松村英一は、書齋人である老大家であったが、すべてをまかせて、いま私はこんなことをしています、いまの駅頭はこんなことになっています、と訴えずにはいられずひたすら歌を送ったのである。

蹴らねば蹴らるるひとつ論理ありかた

むすばむすばむ臍はら当あての紐ひも

『河岸段丘』

逮捕するなできるかぎりとする指示デモ を上司を憎みつつ聞く

歌会で「デモもいけない、上司もいけないで、あなたは一体どちらがわなの。短歌にこういうのがあっていいんですか」などという女性同人の指摘も聞かれたが、松村英一は「御供君の歌には、余情がある。そこを汲み取ることだ」と言ってくれた。松村英一からも千代國一からも、歌の内容をとやかく言われたことは一度もない。指導をうけたのは表現方法についてである。描写せぬ説明はだめ。観念的だからもつと具象化が必要。概念にもたれかかるな。感動の原点に立って、ありのままを描くことが写真だ。複雑を内包した単純化を心掛けよ。などと一字、一句の問題点を洩らさず厳しく指摘された。同時にそこをどう直すかを教えられたことが自分の作歌に大きく役立った。問題点の指摘だけならば、大抵の者でも可能である。作者の個性を生かした上で問題点の改善の方法を明らかにすることが、作歌指導のもつとも肝心なところであるが、案外そこまで踏み込んだ指導というものは稀まれなのである。私は極めてすぐれた指導者に恵まれたことになる。

第一歌集である『河岸段丘』のこうした職業詠三十四首が『昭和万葉集』に収載されたのであるが、作者としての喜びはもとより、一緒に働いていた仲間たちのためにも喜ばしく思わずにはいられなかった。

口中にのこるちぎりの神酒の味汝が口紅

のまじりをるべし

『河岸段丘』

昭和四十三年に結婚し二人の息子を得た。やがて仕事は、労働闘争の退潮に伴い、乗客サービスが主体となる。駅の中のいわゆる、小暴力の取締りや、私服で駅や車内に張り込んで行う、すりや置き引きなどの盗犯の検挙が中心となった。自分の経験がそのまま歌にできるのであるから、なにごとにも積極的で、研究熱心でということになり、公休日でも仕事を休んでいと、せっかく見つけたホシ（「犯人」）が誰かに捕られてしまうのでないかと心配になるくらいだった。駅の雑踏の中ですれ違った一人を「へすり」や「置き引き」の犯人だと気付く感性も、日常の中でふと気づく何ものかを作品とするところの動きも、ピリッと体のどこかに電光のように走るものがある。それに気づくか気づかないかに、別れ目がある。歌は他者を詠うのでなく己を詠うものである。

抜き取らぬうちの手錠に引きてゆくまだ

言ひやまず汚ねえきたねえ

『しやたん
車站』

すれ違っただけで、スリの臭いを感じとるのは感性だが、感性だけでは実績は上がらない。気づかれずに尾行して、犯行を現認して抵抗もされずに逮捕できるのは技術の力で、格別に格闘技の力など必要とせず、タイミングをつかむ呼吸次第である。テレビのような追っかけっこをするのは、捕まえ方がまずいのである。顔の表情を見ていることで、財布を抜き取ったことが分かる。人はその目的を遂げたときに一瞬気がゆるむものである。何かをやれたときには、目付きがゆるむというよりも、思わずにこっとしてしまうのではないか、だからスリも笑う。笑ったときに抵抗はできない。ひたすら笑

顔を待って手錠を何度もふるっていたのだが、掲出の一首は、笑う前に仕掛けてしまった失敗のひとつ。未遂で起訴猶予となったのだが、数年後に同じ上野駅で既遂で逮捕して、うきははらした。

私は一人でホシをあげてくることが多かった。原則として二人一組で行動しているのだが、一人でも出て行って、ほどなくホシとガイシャ（「被害者」）を連れて戻って来た。相棒に気を使わなくてよいぶん気楽なのである。人といるとストレスをためるたちなのである。

昭和十九年の会とかボボオの会とかに参加しているが、人付き合いは苦手である。三十七歳のとき胃を切ることになったのも、酒を呑みすぎたからだとは、決して思えない。

日に三たび五分以内の面会に白衣の妻と

目を見つめあふ

『冬の稲妻』

手術前夜にホテルニュージャパンが焼け、その朝、機長の逆噴射で羽田に飛行機が落ちた。妻と面会に通ってくれた母は私の耳元で「大勢の人が替りに亡くなってくれたんだから平さんは長生きしなければね」と囁いた。このとき私ははじめて自分の死を見つめた。

国鉄の赤字解消の一環として、旅行団体の募集やきつぷの輪旋をさせられたり、高額の実績を設定されて不正乗車の検挙にもつとめなければならなかったが、これはもつとも嫌いな分野の仕事であった。やはりやるからには盗犯や痴漢や偏執的な鉄道妨害犯の検挙がやりがいがあった。踏切の非常スイッチを押して、発煙筒を発火させ列車をとめて興奮していた二十歳の男を捕らえたところ、放火魔で、親子三人を焼死させた事件も解決した。



階段規制をする池袋駅にて(1972年6月13日付東京新聞夕刊に掲載)。中央制服姿が筆者。

御供平信
(みともへいきち)

昭和19年群馬県生まれ。昭和38年(19歳)、「国民文学」に入会、松村英一、千代國一に師事。現在選者・編集委員。日本歌人クラブ中央幹事。現代歌人協会会員。歌集に「河岸段丘」(昭和49年)、「車站」(昭和57年)、「冬の稲妻」(昭和59年)、「神流川」(平成4年、日本歌人クラブ賞受賞)。

よもぎ
御供平信
血のりある刃初そよまき包み水で糊に荷札の
白き幾列
コカイノが大麻カ「アツレを段めし指の巡り
の染める痛みほ
高架ホームの風防ガラスに映る水鏡から下
に日の当りぬろ
流天油を汲むボランテイア五十三雪の浜辺に
命を落とす
街灯に浮かぶよもぎの白じろと若葉を立てて
一夜のねむり

手錠して連れこし室に言葉なし共に若か
らぬ汗噴き止まず

『神流川』
かんながわ

ホシと出会えることは、一種のめぐりあわせで、それには多分に運が係わる。その強運を不思議がる警察官から、「ギャンブルは？ パチンコは？ マージャンは？ ゴルフは？ スキーは？ 酒は？ ……、みんなやらないでなぜ楽しそうに生きていられるのか」と、真剣に問われたものである。人生の中心に短歌があつて、職業も生活も、家族や親類知己も、とりまく自然もすべて歌の素材と思ひ込んで生きていると、こうした外部の声も歌の素材としてうまく使えば、結構面白い作品となるはずである。国鉄民営化による鉄道公安制度廃止により職業も住まいも一気に変らざるをえなかったおりに、よそ目には深刻な事態のはずであったが、自分としては得がたい経験をいかにして作品化しておくのが大きな課題であった。JRに残るよりも、歌を作る時間が得られそうだからと、四十歳台の国鉄離職者を募集していた裁判所の組織末端の廷吏(ていり)という職種を選び、国鉄の宿舍を出て、思いがけずに住み着いた現住地の越谷市では、著名歌人や、はじめて作歌しようという人たちとの出会いがあつた。裁判所でも、古参の書記官から「あなたは何も生活の苦勞をしてない顔をしている」と言われて苦笑せざるをえなかった。一応は鏡を見て、首をかしげた。これ歌にならないかなあと。